OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	M・メルロー＝ポンティにおける知覚的認識の客観性について
Author(s)	中本, 泰任
Citation	カルテシアーナ. 1997, 1, p. 49-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66870
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

M・メルロー＝ポンティにおける知覚的認識の客観性について

中本泰任

序論

M・メルロー＝ポンティにおいて、客観性 objectivité、あるいは客観的世界、客観的思考等々という風に形容される客観的 objectif という概念は、まずなによりも廃棄すべきもの、現象学的還元によってエポケーさるべきものとしての意味を持つ。その主著『知覚の現象学』を単に実存と主観性の哲学であると規定し去ることには疑問があるとしても、実際彼はこの著書で、〈実存〉ないしは〈主観性〉という概念を称揚し、その精細な分析を行っているのである。しかしそうだからと言って彼が科学的客観性とは言わないまでも我々の日常生活上の客観的な世界認知を否認していることにはならないし、また彼において〈実存〉と〈客観性〉という両概念は必ずしも矛盾しあうものでもない。事情は逆なのであって、エポケーさるべきは、古典科学の仮定する超越的客観的統一世界であり、またこのように科学によって想定された即自世界を認識に内在する項に移し変えただけの超越論主義の構成意識の要請なのである。メルロー＝ポンティはこの両者を〈客観的思考〉[1]と呼び、さらには〈常識の思考ー科学の思考〉[1]と呼ぶのであって、彼は

このような意味での客観性の想定を、客観的思考態度を撤底的に批判する。すなわちエポケーさるべきは以上のような客観的統一世界をすでに出来上ったとする常識のドグマ的信念、フッサール流に言えば〈自然的態度〉なのである。しかし判断中止（エポケー）は中止であってその否認ではない。我々が我々個々人に直接的な生の状況にのみ閉じ込められているばかりでなく、それを超えて客観的に思考しうることこそ我々を人間たらしめる所以でもあろう。それが自然的態度と言われるように、客観的思考態度は人間にとって自然であるとするなら、では、もし客観的自体世界を想定したり普遍的構成主観に訴えたりしないとすれば、我々の知の客観性の由来はどこに求められるべきか？——言うまでもなくメルロー＝ポンティはそれを我々の実存的な知覚経験に求めようとするのである。現象学が主観の意識作用との相関関係のうちでありとあらゆる存在者の在り方を問い明そうとするものであるなら、意識の知覚経験こそは存在と意識の接する初次的な場であり、知覚を通してこそ世界が我々に出来するものである以上、結局「我々の知覚経験のただ中に客観の起源を見い出す必要がある」[2]ということになろう。それ故メルロー＝ポンティでは知覚こそが「自我の統一性を可能にし、それとともに客観性と真理の観念を可能にする中核的現象であり」[3]、客観的思考による世界認識は実は「知覚経験の結果であり、自然的結果でしかない」[4]ということになるわけである。要するに彼の哲学上の目論みは、我々の知識の客観性を否定し去ることではなく、実存的な知覚経験にのみ徴することによって、〈客観的世界の権利とその限界〉[5]を新たに検討し直すことであり、彼の標榜する〈現象学的実証主義 positivisme phénoménologique〉[6]とは「このような（知覚）経験の水準において合理性を再確認するものである」[7]と言ってもよかろう。事実『知覚の現象学』では、知覚経験に回帰しようとするこのような試みは、非合理的なものへの回帰ではなく、「科学の諸作業にその十全な意味を与え、科学の諸作業がいつも立ち返ってゆくところの意識の前科学的生活を顕在化し、その秘密を

解明することである」[8]と語られるし、未完に終った遺稿『見えるものと見えないもの』でも尚、「(知覚という)生きられた現象的秩序を、客観的秩序の基礎として正当化し復権させること」[9]とその抱負が語られるのである。ただもちろんその抱負の実現はこの遺稿とともに未完成に終っているし、またメルロー＝ポンティ哲学の難点としてよく指摘されるように、彼は所謂客観的なるものを知覚へと還元することに性急な反面、その逆過程の構成に対する考察に欠けており、その体系立った叙述をなしていない。それ故〈メルロー＝ポンティにおける知覚的認識の客観性について〉と題するこの小論では、彼がいかにして我々の世界認識の客観性を実存的な知覚経験に基づけようとしていたのかを系統立って拾いあげてゆくことをまず第一の目的としなければなるまい。そしてその後でできればそこに存する問題点を指摘してみたいと思う。

さて既述したようにメルロー＝ポンティは客観的世界認識の基底に知覚経験的世界了解が存すると言うのであるが、もちろん客観的な科学知は、それが経験科学である限り我々の世界経験から出発する経験知であるはずだし、またそれが実証科学である限り、その理論の検証の場を最終的には知覚経験のうちに求めねばならないはずである。換言すれば、この世界の科学的記述はそれだけで全てを覆い尽せる完結した表記法ではなく、逆に我々の経験する知覚という根本的前提の上になされ、この知覚に対応させて記述されたものである。通常事物の知覚的規定、たとえば〈色〉は物理学的規定たる〈光の波長〉に還元され、この規定によって説明されているが、実はこの二種類の規定の間の対応関係の順序は逆なのである。《赤とは＊＊・A(オングストローム)～＊＊・Aの波長の光である》という命題を検証するには、検証されるべき命題の述語が表わしている性質とは別の規定によって主語対象が同一指定(アイデンティファイ)されていなければならないのであって、この指定がなされるのは知覚風景の中で知覚風景によってなされるのであり、物理的事物はまず最初に知覚像に

よって定義されているのである。このように知覚による世界の区分、分節化は、それに対応させ重ね合わせるというかたちで科学的記述がなされうるための前提であり条件なのであって、メルロー＝ポンティの表現を借りれば、そもそも知覚経験なくしては科学の用いる概念そのものが有意味たりえないのである。知覚は科学による規定とは独立に、またそれに先行するものとして初次的な世界認識であり、世界を各々同一性を有する様々な〈もの〉や〈こと〉に分節するものである。そして我々はこのように分節された物の、あるいは分節された事柄の様々な同一性の枠組の下で世界を了解している。これらの同一性認知がなければ科学をはじめ我々の経験知が成立しないことは今しがた見た通りであるが、さらにはこの同一性認知という事態が経験的知識の成立条件であり、また〈知識〉が知識と呼ばれうるためには何らかの意味で客観的でなければならないとしたら、この知識の〈客観性〉を支える条件もまたこの同一性認知という事態に懸っていることは明らかであろう。なぜならこの場合同一性とは、私に与えられる知覚像は経験的に様々に変容しつつも、かつ客観的に同一な対象の像であるということであるからであって、ここにこそ、〈質料〉、〈実体〉、〈対象〉等、古来の哲学概念が示しているように、われわれの経験的知識の成立根拠に関する問題の核心が、あるいは存在と知識とに関する問題の核心が存すると言えよう。ところでこのような様々の同一性認知のうちでも、我々の日常的世界理解の中で特に基本的な位置を占めているのが、物と人と世界の同一的構図であるとおもわれるが、ここではそのうちの〈物〉の同一性認知を取りあげてみようとおもう。たとえば我々は物が即自的に物であるという了解を有しているからこそ、ある目的のために製作された道具を、その道具的状況から離れてまったく別の用途にも用いうるわけであろう。もちろんメルロー＝ポンティは、超越的な自体存在の仮定も、超越論的意識一般の要請も援用せず、ただ私的な知覚経験の平面にのみ定位して、そこからいかにして〈物が発祥するのか〉[10]、いかにして〈即自が

我々にとって存在するのか il y a pour nous de l'en soi〉[11]を問おうとするのである。このようなメルロー＝ポンティの方法的態度は最初に見た通りであるが、ここではそれを特に物の知覚に関して考えてみると以下のようになろう。すなわち彼は「知覚は物自体 la chose même を所有するのであって、その一表象を所有するのではない」[12]と言うのであるが、知覚が物自体を捉えるとはもちろん素朴な自然的態度＝常識的客観的思考態度の判断であるからして、彼は先に述べておいたように知覚的認識の客観性を否認するのではなく、かえってそれを肯っているのである。しかしただ常識的思考のドグマティックな判断を中止し、それを実存的な知覚経験へと還元し、様々に変容する私的経験的知覚表象の場から逆に自然的態度の発生を明らかにし、それを基礎づけようとするのである。したがって以下この小論の目的は、いかにして諸々の知覚表象が同一的な物―対象へと関係づけられることによって、私の経験的変容から独立する客観性を獲得しうるのかを、主に『知覚の現象学』の記述のうちから拾集することにある。

I　自然的我れと自然的世界

序論でも見たようにメルロー＝ポンティは現象学を標榜するのであるから、客観的なもの、あるいは即自的なものについての認識を解明せんがための問いを、認識主観の意識生活との相関関係の中で問い明そうとするわけである。それ故彼は、「普遍性と世界を、個別性と主観のただ中に見い出そうとし」[1]、世界の構造と分節を〈主観の超越の運動〉に基づけようとする――「主観とは世界投企以外の何ものでもない un sujet qui n'est rien que projet du monde」[2]。ただメルロー＝ポンティの現象学にとって特徴的なことは、このような主観を意味付与的な形式的構成意識ではなく、具体的個別的な知覚経験意識としたことにあると言ってよい。換言すれば、身体を純粋意識の対象とするのではなく、

身体を対象の〈知覚主体〉となし、意識を上空飛行的意識ではなく世界内の一点に存する身体に住まわせ、意識を肉化 incarner したことにある。つまり身体は単に生理学の対象どなるような客観的身体 corps objectif であるばかりではなく、世界を世界たらしめる主体たる現象的身体 corps phénoménal でもある。そして主体たる身体に対して開かれ、身体によって生きられる世界 monde vécu が知覚世界であって、この世界こそが初次的、根源的な領野であるから、この知覚世界は「それなくしては客観的認識なぞあり得ないような物への最初の開け une première ouverture aux choses」[3]なのである。だがここで注意すべきは、世界投企主体としての身体＝認識する身体corps conaissant による認識は、実存的な生の状況把握、あるいは実践的認識 prakto-gnosie であって、観照的な客観認識なぞではないということである。したがってこの初次的な世界は決して純粋対象といったものではなく（客観的身体も含めて純粋な対象とは一次的な知覚事物の二次的抽象でしかない）、我々の生の状況意味に蔽われたものであり、「知覚世界は、〈情念の炎〉とか、〈精神の光〉とか、その他多くの隠喩や神話が証しているように、人間の生の象徴的記号体系 symbolique である」[4]。たとえば我々の直接経験する空間も、幾何学的等質空間として現われるのではなく、夢における空間や神話の空間、あるいは分裂病者の空間等、我々の生に相関する状況的空間性として出来し、これらの〈生きられた空間、人間学的空間 espace anthropologique〉こそが根源的であり、幾何学的等質空間はその二次的派生物にすぎないのである。

さて以上のようにメルロー＝ポンティは世界を個別的主観に相関させるのであるが、しかしそれでは世界の歴史的文化的相対化や、私的経験的自我による個人的相対化を招来することにもなろう。我々は個別的状況世界内にのみ生きているわけではなく、むしろ私的な状況世界は一般的客観的世界の一特殊例であり、この両世界は重なり合ってい

ると解しているのが通例である。ではパーソナルな状況意味世界と一般的客観的世界の重なりという事態はどのように解されるべきか？　メルロー＝ポンティでは根本的にはこの両世界を可能にするものは、〈世界内存在 l'être au monde〉としての身体、すなわち私を世界内の一点に投錨し世界を一展望よりする私的世界経験に内属せしめながらも、かつその個別性を超えて普遍的全体世界を投企する身体であると考えられるが、一応ここではこの両世界の重なりは、人間的実存が私的実存と身体の一般的実存との重なりであるということに対応していると見なしておいてよかろう。つまり個別的人格的な私の実存の底に、無名の非人格的な、あるいは前人格的な身体の実存が存しているのであって、この身体はあるものをそのように知覚しようとする私の決意によって使用される道具ではなく、いわば自然とあるものをそのように私に知覚させるものなのである。言い換えれば、身体は決意することによって私の個人的意味状況を投企するような人格的主体としての〈je〉ではなく、知覚は無名の一般的主体たる〈on〉が、私から見ればいわば自ずと行うものであり、身体は人格的我れに対して〈自然的我れ le moi naturel〉である。そしてこの自然的我れによって開かれる世界は、私の世界とか誰それの世界とかいうような特定の名前を持たない一般的自然的世界 le monde naturel であって、この世界はアノニムな身体に相関する〈典型的状況 situations typiques〉としての物的ないしは身体的世界 le monde physique なのである。我々はいくらでも任意にこの世界を自らの恣意的な目的意図に基づいて眺めうるであろうし、また現にそうしている。しかしそれが可能なためには、そのような私的状況意味によって彩色されるための基盤としての誰のものでもない一般的世界も同時に与えられていなくてはなるまい。直接的な状況意味からどのくらい距離をとって眺めうるかが、客観的認識の度合いのバロメーターである。そしてまず最初にこのような一般的世界を我々に提示するのが一般的実存としての身体であり、この世界が身体の典型的状況意味と

しての自然的世界である。かくして自然的世界は身体をもつ限りでの我々に等しく、自ずから開かれるものであり、この世界の意味は一般的であって私的文化的世界のア・プリオリとしてその基底をなす故に、あらゆる私的文化的相対性を超出した普遍的一義性をもつものと言えよう。ただここで注意すべきは、〈私的実存―私的文化的世界〉と〈身体的実存―一般的自然的世界〉との関係であるが、この関係は一方が他方を一方的に規定しているといった類のものではなく、普段の実践的生にあってこの両者は一体化し相互依存の関係にあるということである。したがって自然的世界を、個々の私的な経験による変容や、文化的意味の変容を担う基体的存在と見なしてはなるまい。メルロー＝ポンティはこの世界のもつ意味を一般的な典型（タイプ）、様式（スタイル）、あるいはモンタージュと表現する。つまり個々の私的文化的世界は、モンタージュとしての一般的自然的世界のバリエーションであると言えようし、逆に自然的世界は私的文化的世界の諸変化を通して初めて覗きうる典型（タイプ）とも言えよう。そうしてメルロー＝ポンティはこの非人格的世界の典型的意味をゲシュタルトとし、この一般的自然的世界のうちに客観の起源を見い出そうとするのである――「実存は、私から客観性を隠すような諸々の世界を自らのまわりに投企する行為と、これらの諸々の世界をただ一つの自然的世界 un unique monde naturel の地の上に浮び上らせることによって客観性を意識の目的論の目標に指定するという行為を、ただ一つの運動でもって行うのである」[5]。

Ⅱ　差異的意味＝ゲシュタルトとしての知覚世界

前節では一般的自然的世界に我々の知の客観性の起源を見、この世界のもつ典型的意味をゲシュタルトとしたのであるから、この節では知覚世界におけるゲシュタルトの問題が検討されなければならない。

さて身体は、従来の機械論的生理学の主張するように、対象としての客体世界に組み込まれ、そこを貫く一連の因果的諸関係で尽されうるものではなく、神経系の本質的機能はむしろ逆に刺激によって生じた興奮を能動的に分化し、刺激形態を認知することにあるのであって、諸刺激が一つ一つとしては、また物理的な要因としては持たなかったような意味を付与するところの知覚主体である。したがって知覚野は、知覚の恒常性仮説批判が示しているように直接的な刺激と一対一に対応している要素的な感覚印象のモザイクではなく、〈一つの知覚的構文法 une syntaxe perceptive〉、すなわちゲシュタルトとして生起しているわけで、このような個々の要素の総和には還元しえない内的分節をもったゲシュタルト的全体、意味的構造をもった知覚野こそが初次的なものと見なされるのであるから、「世界の統一性は認識による明白な認定作用のなかで措定されるより前にすでにつくられたものとして身体によって生きられており」[1]、「また〈形態（ゲシュタルト）〉とは世界の出現の可能性の条件ではなく、世界の出現そのもののことである」[2]ということになろう。

さてこのような意味形態はゲシュタルト学説の言うように、諸刺激与件間の差異的関係性によって生ずるものである。たとえば音楽を構成するメロディとは一つのゲシュタルトであるが、音楽的意味としてのメロディは、個々の音の周波数の間の差異、すなわち音程関係であるし、紙面上の線描は、明度や色の間の差異によって〈図〉と〈地〉に形態化されるのである。そしてさらにゲシュタルト理論の示すことであるが、こうした知覚野の差異的構造たる形態こそが、我々の経験に与えられ様々に変化する個々の感覚与件を超えて知覚対象の恒常性を保ち、ある対象を正にその対象として同一認定（アイデンティファイ）し、知覚物の客観性を保障するのである。要するに知覚野の形態―意味とは刺激与件間の差異であり、この〈差異的意味〉が知覚の恒常性に与っているのである。このような事態が所謂〈知覚の恒常性現象〉で

あって、たとえば調性音楽においてある音が属音としての意味をもって同一認定されるのは他の音との距りである音程関係によってであるし、対象としての〈図〉は〈地〉に比して、直接的刺激の変化がその対象に強制しようとする様相の変化（色、形状、明るさ等々の変化）に対して抵抗する度合いが強いのである。遠ざかりゆく対象は網膜上の像に比べてそれ程小さくなったようには見えないし、斜めに提示された立方体の側面は菱形に結像しているにもかかわらず尚正方形に見えがちである。つまり対象として他から差異化された図における変化は、その対象に本質的な変化ではなく、外部から付加された附帯的変化であるように知覚され、当の対象は対象そのものとして同一のままに止まるように知覚されるのである。それ故通常我々が〈見〉、〈聴く〉と言っているものは物理的刺激に対する感覚与件なぞではなく、それらの間の差異たる対象意味であろう――「一般的に言って見えるものとは、我々の視覚に全く裸のまゝ提出されるところの絶対的に堅牢で分割できない存在の一断片ではなく、（中略）色とか物とかと言うよりも、この世界のある種の分化 différenciation であり、したがって色の間の、あるいは物の間における差異 différence である」[3]。日常言語が示しているように我々の見るのは一棹の机であり、知人の姿（スタイル）であり、我々の聴くのは意味としての音楽である。知覚は凸凹鏡面に映った像を、つまりその像を形成する個々の要素がトポロジカルに変換された像をすぐさま誰それと認知するような端的な相貌知覚であって、机の材質そのものとか、知人の顔色とかの附帯的感覚的性質は、後にその対象を入念に観察しようとする場合にはじめて留意されるものである。このことは日常言語が主語―述語構造を有し、まず記述の対象を主語によって同一指定し、それに述語づけるということと類似的であろうし、また日常言語が単にセンス・データ言語のみならず、対象言語をそのうちに含んでいるのと類似的であろう。対象言語がある事物を一つの意味的まとまりとして指示することによって言語記述が有意味たるように、知覚がいやしくもすで

に何らかの認識である以上、知覚は偶然的な経験与件の集合なぞではありえず、個々の無意味な刺激は対象意味に関係づけられることにおいてのみ知覚として現出し、「実在する物はあらゆる感覚的与件とその意味の同一性として与えられるのである」[4]。

しかしここで知覚におけるこの形態―意味を、構成主観が感覚所与に一方的に付与するア・プリオリな意味と解してはなるまい。先に見たように構造化された形態とは、感覚刺激間に偶々強度や質の差異がある場合にしか生じえず、この場合意味とは差異でしかない。それ故差異としての意味は実際には肉眼には見えないものであるが、この差異的意味は肉眼に見える経験的物理刺激に依存しているのであり、音楽が物理的音の集合のうちにはじめて成立するように、様々の経験的現われとしての立方体は一つの対象意味としての立方体へと収斂することにおいてのみ立方体知覚たりうるとしても、逆に経験的与件としての諸射映なくしては立方体の意味は立ち現われないのである。このように一般的典型としての形態と、個々の経験的感覚与件とは相互依存、相互浸透の関係にあるわけであるから、知覚される自然的世界では、〈意味と形態をとるのは質料そのものである Dans chaque perception, c'est la matière même qui prend sens et forme〉[5]と言われるのである。要するに知覚野のもつ意味は、ゲシュタルト心理学が結論したように実在論的に存在するものでもなく、また認識主観によって付与される純粋にイデアルなものでもなく、「(幾何学者の定義するような)立方体の《意味》、本質、プラトン的なイデア、対象、それらは何々がある ilya が具体的に凝固したもの concrétion であり、動詞的な意味における Wesen であって」[6]、意味は、世界内に存し私を私的経験に内属せしめながら、かつそれを超えて一般的典型としての世界を投企するところの両義的身体によって、存在のうちに湧出し、〈意味化〉するのである。

Ⅲ　知覚の両義性

これまで見てきたようにメルロー＝ポンティは、客観的なものの認識の由来を、自然的知覚世界のゲシュタルト的条件に求めるのであるが、ゲシュタルト理論が援用される理由はX・ティリエットの言うように、ゲシュタルトが実体的な物でも、認識論的にア・プリオリな観念でもないからである。知覚物の恒常性の条件をなす形態－意味とは、偶然的な経験与件に依存していることによって客観的思考の理想を破壊するとともに、かつ経験与件を超えた一般的意味として客観性を目指すという極めて両義的なものである。それ故古典科学的実在論にしろ、認識論的超越論主義にしろ、客観性を固定化した永遠のものと想定するような思想を拒否するメルロー＝ポンティにとって、このような知覚のもつ両義性は、よく言われるように彼の哲学の中心的概念であろう。以下この両義性の問題を考えてみる。

さて知覚野の形態とは現に actuel 与えられている経験的感覚を超えた意味的全体である。知覚野はつねに図・対象－地というように差異化されており、この対象－地平という構造においては、地は図によって切断されず図の下に連続しているように見え、したがって図は現に私に向けている面のみではなくその裏側の地に向けている面も持っているようにおもわれるのである。これが所謂知覚の〈地平構造〉であるが、この地平構造によって、有限なる私の視覚には実際現前していない対象の裏面や側面も、現に見えている知覚光景のうちに内包されていることになり、「私の知覚は他人の、また私が場所を移すことによって得るであろう経験を、その全ての点で確証し、かつこれと符号するような無限の知覚的連鎖を同時に存在させているのである」[1]。つまり知覚野の現勢的（アクチュエル）な局面が形態意味として分節化された地平構造を有しているということは、したがって知覚はその一局面のうちに他のあらゆる可能的局面を潜在的に

virtuel 先取りする包括的なものであるということであって、そしてこのような包括的な知覚によって対象は一挙にあらゆる点から見られ、これが実際の経験与件を総合して対象を客観的対象たらしめるのである――「物の可能的局面の一つにしかすぎないと自分にも解っているような〈パースペクティブ的一局面〉のなかに、私は単なる局面を超越する〈物そのもの〉を捉えるのである」[2]。以上のように知覚物はその地平構造による総合〈synthèse des horizons〉によって全き対象性を獲得するのである。前節では知覚対象はその差異的形態意味によって総合されることを見ておいたのであるが、したがって、意味の総合と地平の総合とはまったく同じ事態であることになる。つまり知覚野が形態化されていることと地平構造を有していることとは同一の事態なのである。このことを言い換えれば以下のようになろう――現に私の見ている展望的風景の地平は、そのかなたに現には見えない風景を暗に指示し、あるいは見る主体としての身体をその風景の観点まで暗に移動せしめ（つまり主体としての身体を遍在 ubiquité せしめ）、かくて一つの展望は次々と他の展望へと移りゆき、あるいは遍在する身体はあらゆる観点から展望し、かつこのような諸々の展望のつき混ぜの上に、実際的経験与件を超えた対象意味を現出せしめるものである。さてこのような地平構造は当然知覚がゲシュタルト化されている限り、そのあらゆる点について確認することが可能である。先にあげた音楽におけるメロディは現に鳴らされた音の間の差異＝地平的意味が来るべき音を先取りし、誘発することによって総合されるのであるし、またたとえば知覚される空間は客観的等質空間ではなく、身体によって生きられる実存空間であるが、この空間を「我々は自分の身体が現に在る位置の系 système des positions actuelles としてのみではなく、さらにまたそのことによって、他の方向づけのなかで無限に等価の位置をとりうる開かれた系としても有しており、このことが空間を一つの客観的体系たらしめ、我々の経験が対象の経験として〈即自〉へと開かれることを保障しているのであ

る[3]」。以上のように結局、諸展望をつき混ぜるような包括的全体としての地平的意味、前節の言葉を用いれば〈あらゆる可能な存在の類型表 une typique de tout l'être possible〉[4]たる普遍的モンタージュ、様式、それがあらゆる知覚の地平の地平としての自然的世界である。そしてこの様式的意味は現には肉眼には見えないものであるが、それなくしては即自的な対象知覚がありえない以上、この見えない地平的意味は「現勢的で、経験的で、存在的な見えるものの原理であり、条件であり[5]」、この様式とは個々の私的経験的知覚変異を、そのスタイルの一変異とするような典型である、あるいは逆にこの典型が個々の具体的経験によって埋め合わされることによって、〈(客観的な)物はこの世界の可能な具体化 une concrétion〉[6]として現出するのである。

ところでこの形態(ゲシュタルト)たる地平的意味は、しかしながら前節でも見ておいたように経験的感覚与件からア・プリオリに独立し、その変化に左右されない恒常的一意性を有するものではないのであって、刺激与件間に偶々明瞭な差異がある場合にしか現出しえず、結局それらに依存しているのである。したがって対象の地平的総合が可能なのは、その対象を現に私の居る位置から知覚し経験するその限りにおいてであるから、知覚は物自体を把握するとは言われながら、現勢的経験的側面に限って言うなら、対象ー意味は肉眼には見えないものであり、知覚物はつねに有限な一局面においてしか与えられず、部分的である。したがって「対象の統一というのは現実的な統一 unité réelle ではなくて、経験の地平での推定的統一 unité présomptive でしかありえない[7]」。言い換えれば知覚主体としての身体の遍在は当然現実的なものではなく、推定的な遍在である。そしてまたそれ故に意味的拡がりをもつ自然的世界は、現勢的に全的に開かれるものではなく、推定される一つの信念であって、要するに「知覚するとは、諸経験の未来全体を厳密に言えばそれを決して保障していない現在の中に一挙に巻き込むことであり、一つの世界を信ずる croire ことなのである[8]」。

だが信憑とは言いながら、地平的総合による見えない意味がないところただ一つの〈物〉の知覚経験もありえず、またさらに世界はまず最初に〈知覚〉として湧出するのであるならば、この世界信憑は、〈始源的信憑 foi originale、根源的臆見 Urdoxa, Urglaube〉[9]と言われねばなるまい。かくして知覚とは両義的なものである。その両義性とはこれまで見てきたように、私的実存による世界↑↓一般的実存的世界、経験的刺激与件＝見えるもの↑↓その差異としての地平的意味＝見えないもの、現実的展望による物の一局面↑↓それを超越する信憑的物そのもの、等々の両義性である。もちろんこの両系列は一つの知覚のもつ両側面であって、知覚が正常な知覚であるためには欠くべからざるものであり、この両者は相互依存、ないしは〈弁証法的関係〉にある。

ところでメルロー＝ポンティは、こうした知覚の両義性は〈時間〉のもつ両義性であり、知覚のもつ矛盾は、「〈知覚〉意識の遍在性と、それが現在野 champ de présence に巻き込まれていることの間の矛盾であって[10]」、知覚はその本質からして時間的なものであるとする。したがって以下、〈時間〉の問題を簡単に見ておかなければならない。

Ⅳ　時間性

知覚は身体によって世界内に局所づけられた有限な私に対して開かれる以上、現勢的には世界の一射映としてしか与えられないが、まさにそのことによって、つまり一射映の地平構造の意味的総合によって、あるいは推定的に遍在する身体主体によって全体的世界へと超越するものであり、これが知覚の両義性と言われるものであった。つまりゲシュタルトとしての知覚は〈物〉と〈私〉の相互関係から生じるものである。そしてこうした知覚の両義的事態は実は時間のもつ両義性であり、「時間とは物に対する私の関係から生ずるものなのである[11]」。結論を先取りして言えば、一

展望としての現勢的知覚とは、〈存在と意識が一致する地帯〉としての現在的知覚であり、また意味地平による推定的総合とは、過去―現在―未来という地平による時間的総合なのである。このように時間とは即自世界に実在論的に存在するものではない。なぜなら「物そのものにおいては、未来と過去とは一種の永遠の先在 préexistence と永遠の残存 survivance としてしか存在せず」[2]、結局そこに存在するのは継起することもない〈今〉のみであろう。知覚世界こそ源初的なものである以上、あらゆる存在は有限なる私の知覚意識へと現勢的―現在的に到来し、現前することによってのみその明るみへともたらされるはずであろう。そして私の視覚が有限であるかぎり、現に現前していない他の存在は、やがて現前するであろう存在か、もしくはもはや現前し去った存在かのいずれかであって、そこに初めて過去―現在―未来という時間の諸次元が生じるのである――「過去と未来は主観性が即自存在の充溢を打ち砕き、そこに一つの展望を描き出し、非―存在を導入するときにのみ存在する」[3]。しかしもちろん知覚は現勢的―現在的展望に閉塞されてしまっているわけではなく、他の潜在的展望、つまり過去や未来の展望をそのうちに含み、それらは意味的に統一されている。だがこの統一はア・プリオリな構成主観によるものではなかったのであるから、過去―現在―未来という時間の各次元の統一は、ア・プリオリに自己同一的な意識がその対象として構成するものでもないはずである。自然的知覚世界は一信憑であって、構成主観によって客観化され永遠化された世界ではない。もし意識が時間をその対象として構成するゆえに、時間の各時点に自由に現前し、意識が現実的（レエール）に時間的に遍在するとすれば、世界のあらゆる展望は現勢的―現在的知覚となり、時間はまたしても水平化された〈今〉の系列になってしまうであろう。身体主体の遍在は、つまり地平の総合は推定的なものであり、現勢的展望と潜在的展望とは截然と異った次元にありながらしかも統一されているのであるが、このことと平行して時間の過去―現在―未来は各々截然と異った次元にあ

りながら、しかも自己同一的でなければならない。また知覚の現勢的展望がその地平によって潜在的展望を指向しているのと平行して、現在はフッサールの言うようにそのうちに過去把持 Retention と未来把持 Protention を持つ現在野として、時間の総合は指向的な地平の総合なのである――「時間は線ではなく、指向性の網である[4]」。ところでこのような知覚の時間性を如実に示す好例は音楽である。メロディとは現に鳴っている物理的音と、過去、あるいは未来に鳴らされる音の間の周波数の差異による意味的統一体である。そうしてみるとメロディ的統一とは時間的統一であり、音楽のもつ意味とはまさに時間そのものと言えよう。知覚が経験与件たる現在的展望の地平構造の意味指向によって、過去や未来の非現前的展望を統一し、対象を対象として意味的に総合するということは、この〈意味的総合〉が、そのまま過去―現在―未来の地平的統一たる〈時間的総合〉であるということである。音楽の例で理解されるように、また離人症患者が時間の崩壊感とともに意味的統一のある世界の崩壊感を訴えているように、知覚の総合は時間的総合であり、〈時間とはすなわち意味なのである temps et sens ne font qu'un〉[5]。先にあげた立方体知覚の例をもう一度取り上げてみると、斜めに提示された立方体の側面は、網膜上には菱形に結像しているにもかかわらず、尚正方形に見えがちであるが、この現象は実際的な刺激与件が知覚野の地平によって意味的に総合されていることによるのであって、これが知覚の恒常性現象と呼ばれるものであった。この現象を今度は時間的観点から考えると以下のようになろう――現在私の目の前にある立方体は、今もし仮に、現に私の居る場所とは異った視点から眺めれば得られるであろうような視像をことごとく暗にそのうちに含んでいるわけであるが、このことの意味は、現に知覚されている立方体は、〈かつて〉ある視点から眺めればそう見えたはずであり、〈将来〉実際にその視点から眺めればそう見えるであろうそのような過去から未来へと向う時間的道行きの途上に現在ある立方体であるということなのである。も

ちろん〈今もし別の視点から眺めれば〉という仮定は、〈反事実的条件法 contrary-to-fact conditional〉(注)と呼ばれ原理的に検証不可能な命題であるが、世界信憑なくしては知覚が知覚たりえない以上、この検証不可能な確信なくしては、具体的世界の知覚、正常な〈立方体〉の知覚はありえないのである。

ところでこのように知覚野の時間的地平の上に意味を指向し対象を対象たらしめるものは、世界投企主体たる身体＝一般的身体的実存であったが、このことを言い換えれば、実践的主体である身体的実存の指向弓 arc intentionnel の緊張にともなって意味的統一のある世界が世界化するわけであるが、世界が世界化し、意味が意味化することと、時間が時間化 se temporaliser する（ハイデッガー流に言えば時熟する zeitigen）こととは同一の事態であるということである。時間の各次元が、あるいは知覚の各時相的展望が地平的に統一されているとは、各時相の展望が〈自己の他〉として、つまり過去的展望とはすでに移行し去った自ら自身として、また未来的展望とはやがて自ら自身へ移行すべきものとして互に重なり合っているということであり、知覚の地平的総合とは、時間の移行としての〈移行の総合 synthèse de transition〉である。それ故、意味を指向することによって知覚を知覚たらしめるところの実存とは、移行することにおいて自己自身に一致する自己同一的な時間性であり、意識は各現在的な意識内容のみに閉塞された即自的なものではなく、各々異った次元にある各時相的意識の間の自己関係であり、〈自己の自己への関係 le rapport de soi à soi〉たる主観性なのである――「時間を主観として、そして主観を時間として了解しなければならない」(6)。ところでそうすると時間が時間化するのと意味を同じくして、主観は主観化するものであると言われなければなるまい。自己同一的な意識としての私とは、意味を、あるいは統一的時間を指向することにおいて知覚物を物そのものとして物化し、客観を客観化することにおいてのみ、対自的な私と成ると言えよう。離人症患者は〈自我〉の崩壊感と同時

に〈世界〉の崩壊感を訴えるのである。かくして知覚とは、自我の統一性とともに客観性の観念を可能にする中核的現象と言えよう。もちろん知覚対象が推定的総合による信憑であるのに対応して、自我の統一性も信憑にとどまるが、知覚が原初的領野である以上、それは根源的信憑として明確な知覚の成立しているところ、この両者はつねに出現しているのである――「世界の統一性と我の統一性は、私が知覚作用を行う度ごとに、私がある明証性を獲得する度ごとに、体験されるというより要請されるのである[7]」。

以上のようにメルロー＝ポンティは、古典科学的な物そのものも、ア・プリオリな構成意識も前提することなく、その両者を〈物と私の関係〉たる両義的知覚＝「《主観》と《客観》、存在（エグジスタンス）と本質（エサンス）とが同時に混ぜ合わされて我々に与えられているところの経験[8]」に還元し、この知覚を徹底的に分析することによって逆にこの両者の発生を明らかにし、この両者を知覚に基礎づけようとするのであって、ここにこそ彼の哲学の真骨頂があると言えよう。

結　語　―両義性と客観性―

以上、知覚的認識の客観性という課題に即して、主に『知覚の現象学』の記述を追ってきたのであるが、そこで逢着した大きな問題は、知覚の両義性という事態であろう。この両義性とは繰り返しを厭わず言えば、「私の知覚は一定で有限なものでありながら、かつ世界とおなじ拡がりをもち世界を徹底的に展開しうる一認識能力である[1]」ということであり、知覚は私の実際的な経験を通して、かつそれを超える物そのものを信憑的に捉えるものであるということである。メルロー＝ポンティはこのように経験に依存しながらそれを超越する意味を指向するところの両義的知覚にのみ徴しようとするのであるから、彼の言う〈現象学的実証主義〉とは、「私の偶然的経験を通じて普遍妥当性をもっ

た意味を捉えるもの」[2]であり、「演繹的認識でもなければ、また単なる経験的認識でもない認識様式」[3]であるということになろう。さて今、この知覚の両義性を当面の客観性の問題に即して言い換えれば以下のようになる――知覚事物の客観性は、知覚の経験的側面に徹する限り一信憑にすぎないのであるから、メルロー＝ポンティは超越的客観的世界自体、あるいはア・プリオリな客観認識という意味での客観性を否定しているのであるが、それと同時に知覚世界を初次的根源的なものとなし、その信憑を根源的信憑となすことによって、我々の知の客観性を肯い、それを基礎づけようとするのである。そして彼は、序論でも見たように、科学的客観的思考を、このような知覚物によって定着された認識理想のドグマティックな延長であり、その極限理念であるとするわけである――「客観的思考の理想――物理・数学的相関関係の束としての経験の体系――は、それ自身との一致のうちにある個体としての世界の知覚に基礎づけられており」[3]、「もし科学がこうした（知覚の）根源的ドクサ・信憑に支えられているのではないとしたら、客観的真理を構築しているのだという私の意識にしても、私にとっての客観的真理しか与えてくれないであろう」[4]。

さてところでこのように両義性と客観性の間の関係を見るならば、知覚的認識の客観性は、その両義性のうちの経験的側面にではなく（経験的側面は客観性を信憑に留めるものである）、意味指向によって対象を推定的に総合し、客観を客観化する知覚主観の側面に基づけられていると見なされなければならない。換言すれば知覚的認識の客観性は、両義的身体のうちの〈客観的身体〉にではなく、客観化指向としての知覚主体たる〈現象的身体〉にその基礎を持っていると見なされるわけである。したがって、X・ティリエットの言うように、『知覚の現象学』の記述から、知覚の両義性から、その有限性、その経験的契機を無視すれば、メルロー＝ポンティの哲学は主知主義的色彩を帯びていることが明瞭になる――「彼が解きほぐしがたい根源的な混淆、すなわち両義性から逃れようとするやいなや、彼は伝

統的な超越論主義に復帰することになる」[5]。だがあくまでも彼の『現象学』の特徴を両義性に求めるならば、つまり彼が意識をア・プリオリな形式的なものではなく、それを世界内に存する身体に根付けすることによって経験に内属せしめ、知覚を〈私と物の関係〉としたことに重点を置くならば、この〈両義性と客観性〉の問題はまた新たな様相を帯びてくるのである。以下この新しい問題に簡単に触れておかなければならない。

さてメルロー＝ポンティは、知覚が身体によって営まれる以上、この小論で見てきたような知覚の両義性の根底に〈身体の両義性〉を据えるのであるが、その両義性とは、身体が物として〈対象 objet〉の秩序に属する一方、また物を知覚する主体として〈主観 sujet〉の秩序に属し、この両者の特性を合せ持っているという両義性である。そしてこの身体のもつ両義性の故に、知覚は世界の一経験的展望に内属せしめられるとともに、それを超出しうるという両義的性格を有するのである。ところでメルロー＝ポンティは『見えるものと見えないもの』のノートに次のような事を記している――「脳損傷のような《客観的（オブデェクティブ）》秩序の事実は、（私と）世界との関係のトラブルをひき起しうるのであって、このことは《意識》が客観的身体の全面的な関数であることを証している」[6]と。ところがするとここに一つの循環的矛盾が生ずることになる。それというのも、先の〈現象的身体〉と〈客観的身体〉との区別において、〈客観的身体〉とは、知覚主観による客観化指向によって認識された結果であるはずだが、この結果であるはずの客観的身体がまた知覚意識を条件づけるとは明らかに論点先取になるからである。この小論で結論したように、生理学の対象たる客観的身体も、物理学の対象とする客観的な物も、知覚の主観的条件によって客観化された結果であった。ところがその結果たる客観的身体、ないしは〈客観的秩序〉が知覚主観を条件づけるとは循環論法であろう。したがってこれまで検討してきた客観的な物、客観的身体という概念と、両義的知覚とは〈私と物との関係〉であると言われる場

合の物や、〈客観的秩序に属する身体〉と言われる場合の客観的という概念とは混同されてはなるまい。前者は本論考で問題にしたように〈認識的な規定〉であり、後者は存在の様相に関わる問題であろう。つまり意識をその関数とするような客観的身体とは、知覚結果の二次的抽象たる概念的存在ではなく、いわば実在的身体ということであろう。そうするとメルロー＝ポンティが〈客観性〉と言う場合、知覚現象を原初的なものと見なしているという点からすれば、彼はそれを知覚認識の結果としての客観的対象という意味にのみ解しているとも考えられるし、また客観的秩序にも属する身体による知覚は物と私の関係として両義的であるとする点からみれば、メルロー＝ポンティはこの客観的秩序、あるいは物を、知覚を条件づけるものとして現象の背後にいわば本体的なものとして想定しているとも考えられよう。『知覚の現象学』ではこの点が曖昧であるようだが、それは彼自身によってたとえば、「『知覚の現象学』で提出された諸問題は、私がそこで《意識》－《対象(客観)》の区別から出発していたため解きえないのである」[7]というように反省され、やがて『見えるものと見えないもの』では存在論的に取り上げ直されるのである。しかしこうした問題は稿を新めて論じられなければならない。

（註）

序論

(1) M.Merleau-Ponty, Phénoménologie de la percepion, Paris 1945（以下P.P.と略記）P.86

(2) ibid. P.86

(3) P.P. p.55

(4) ibid. p86
(5) ibid. p69
(6) M. Merleau-Ponty, Les sciences de l'homme et la phénoménologie, les cours de Sorbonne, p9
(7) ibid. p11
(8) P. P. p71
(9) M. Merleau-Ponty, Le visible et l'invisible, Paris 1964（以下V.I.と略記）p. 263
(10) P. P. p71
(11) ibid. p86
(12) V.I. p21

Ⅰ　自然的我れと自然的世界

(1) P. P. p465
(2) ibid. p491
(3) ibid. p113
(4) ibid. p369
(5) ibid. p340

Ⅱ　差異的意味＝ゲシュタルトとしての知覚世界

(1) P. P. pⅫ

(2) ibid. p74
(3) V. I. p175
(4) P. P. Table des matières
(5) ibid. p374
(6) V. I. p256

(注)ゲシュタルト心理学については、P・ギヨーム著『ゲシュタルト心理学』岩波現代叢書を参考にした。

Ⅲ 知覚の両義性

(1) P. P. p390
(2) M・メルローポンティ『行動の構造』みすず書房 p278
(3) P. P. p166
(4) ibid. p490
(5) V. I. p199
(6) P. P. p377
(7) ibid. p254
(8) ibid. p343～344
(9) ibid. p395
(10) ibid. p382

Ⅳ　時間性

(1) P. P. p471
(2) ibid. p471
(3) ibid. p481
(4) ibid. p477
(5) ibid. p487
(6) ibid. p483
(7) ibid. p465
(8) V. I. p172

(注)―〈反事実的条件法〉および知覚の時間性については、大森荘蔵「三つの比喩」『理想No. 486』参照

結語―（両義性と客観性）

(1) P. P. p424
(2) M. Merleau-Ponty, Les sciences de l'homme et la phénoménologie, p12
(3) P. P. p402
(4) ibid. p408
(5) X・ティリエット著『メルロー＝ポンティ』大修館書店　p54
(6) V. I. p253

(7) ibid. p253

(注)—尚、この小論は修士論文を三分の一程度に要約しかつ加筆したものである。

（博士課程学生）